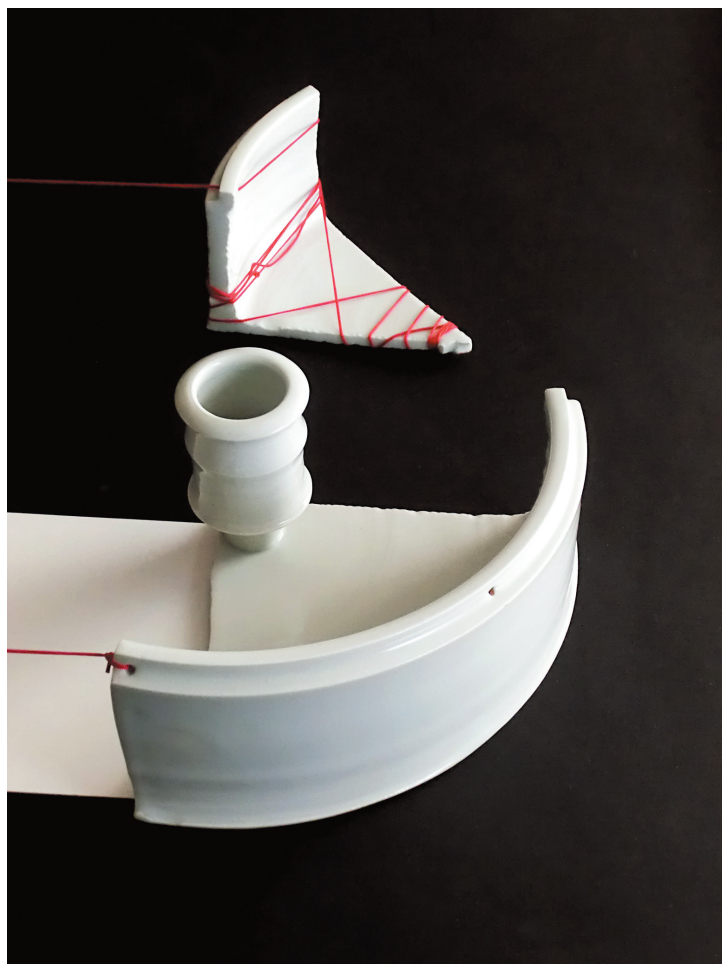


アートギャラリー

白磁
＝頼朝ふたり＝

石田成昭



奈野 5 3 2 高 10cm

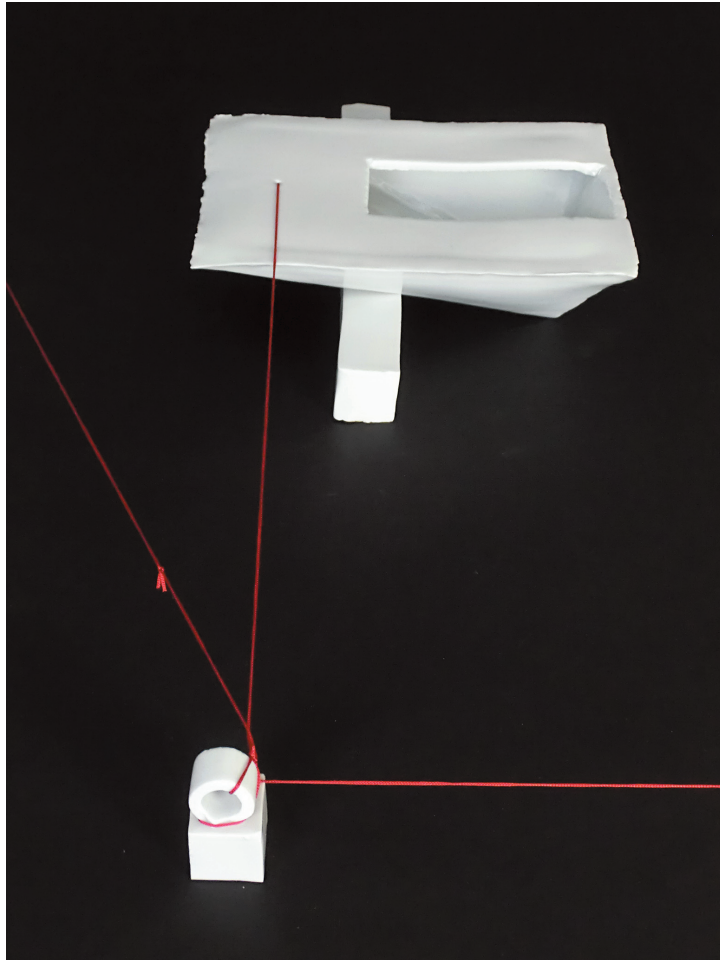
—頼朝ふたり—

19才の夏、私は浪人中で将来の確たる目標も無く鬱々とした日々を過していたが、たまたま立ち寄った京都国立博物館で人生の転機となる一枚の絵に出会った。それは国宝・伝源頼朝像。見た瞬間全身が芳香で包まれ何とも言い様の無い感動を覚えた。後日それは肖像画の最高峰で名画中の名画であることを知った。イクニを造ろうとした将軍の堂々とした品格のある容姿に、芸術の偉大さ美術の深遠さを深く実感し、美術の世界にこの吾が身を置いてみたいと強く思った。ヨシ決めた、美術大学へユクゾ。頼朝に背中を押され即断したものの、今振り返ると無謀な事をしたものと思う。無論この時点では焼物屋になるなど努々思いもしなかったが、幸か不幸か綱渡り人生の第一歩となった。ふとキャプションを見ると“模写”とある。アレこれは模写なのだとびっくり。本物は毎年5月に虫干しを兼ねて一般公開されているが、年を経ること丁度50年、平成26年秋、常設展示場・平成知新館が建ちそのオープン記念展で、本物の頼朝像に初めてお目に掛かった。イヤアもうこれは具象画ではなく抽象画、平面ではなく立体である。黒い衣が描く鋭い直線と頭部の柔らかな曲線とが絶妙のバランスを保ち、襟元の赤が何とも艶やかである。実はモデルは頼朝ではなく別人と云うのが今や定説となっているが、その様な事はどうでもよいと思わせる程桁外れの絶品である。

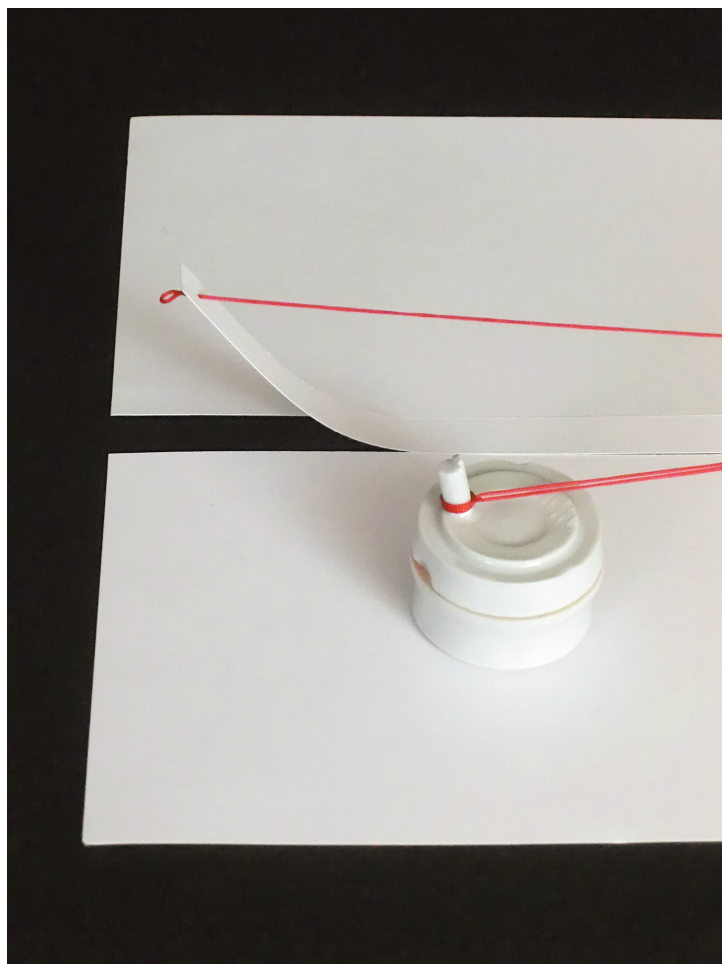
さて19才の時見た頼朝像は今いづこにと博物館に問い合わせたところ「その様なものはございません。そもそも当博物館では模写を陳列することはございません」と意外な、しかし考えてみれば至極もつともな返事、では私の見た頼朝像は一体何だったんだろう。夢か幻を見たのだろうか。学芸員の方に素気なく言われてしまったが、私にとっては忘れ難い頼朝公なのであります。行方不明の模写は本物以上に私にとっては大切な宝物なのであります。

模写を見たのがほんの4、5日前の事の様に思える。

夢追うて 頼朝ふたり 夢の中
夢と土食み 一睡の夢



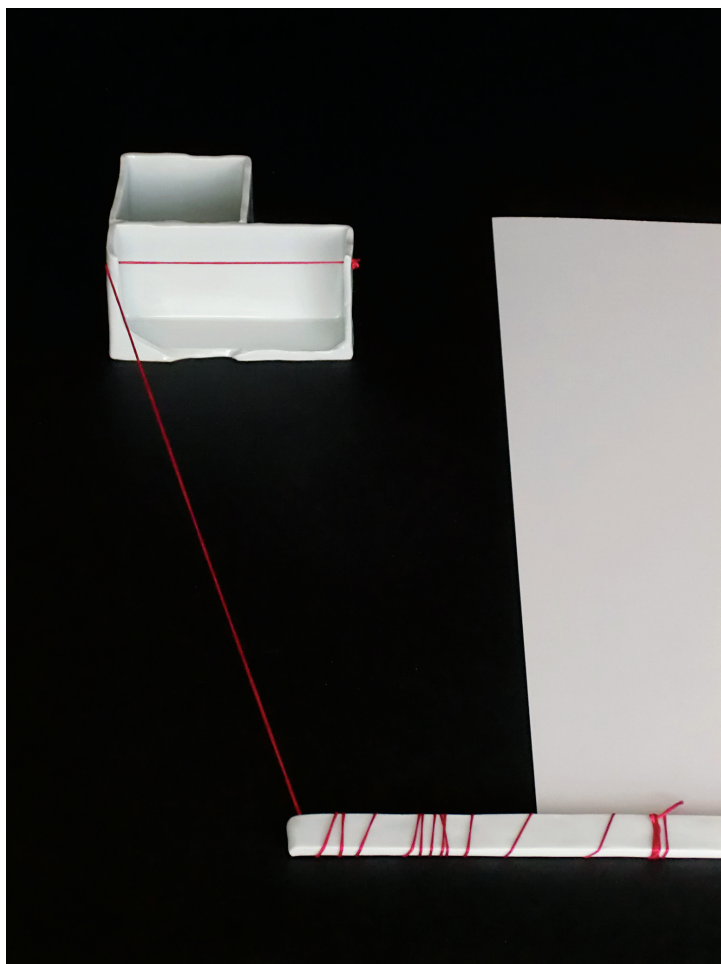
奈野 5 4 5 高 9cm



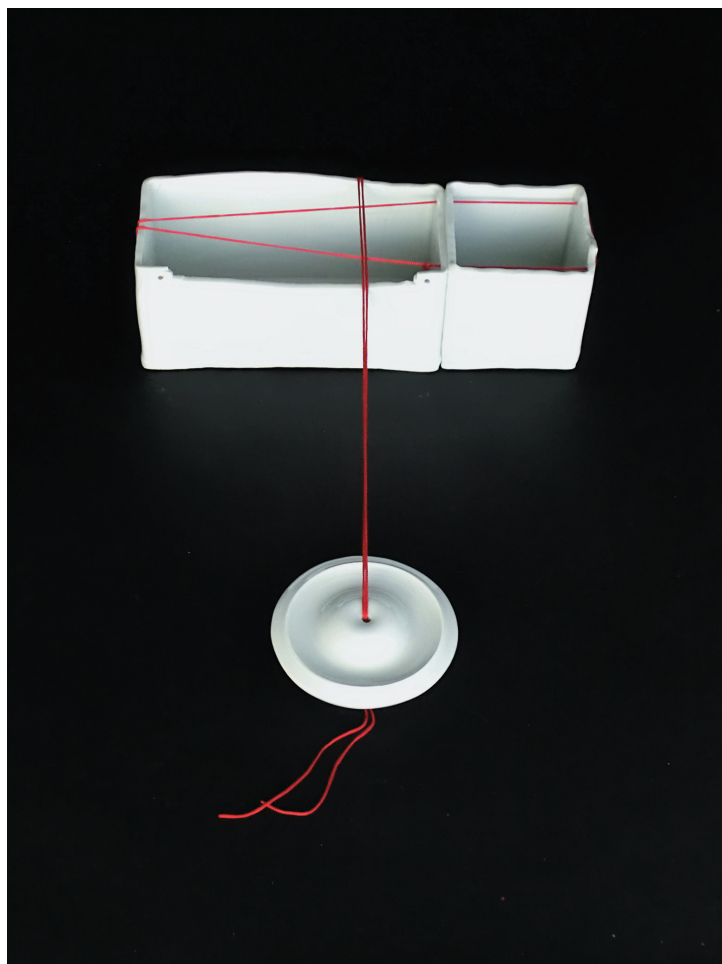
奈野 5 4 4 高 6cm



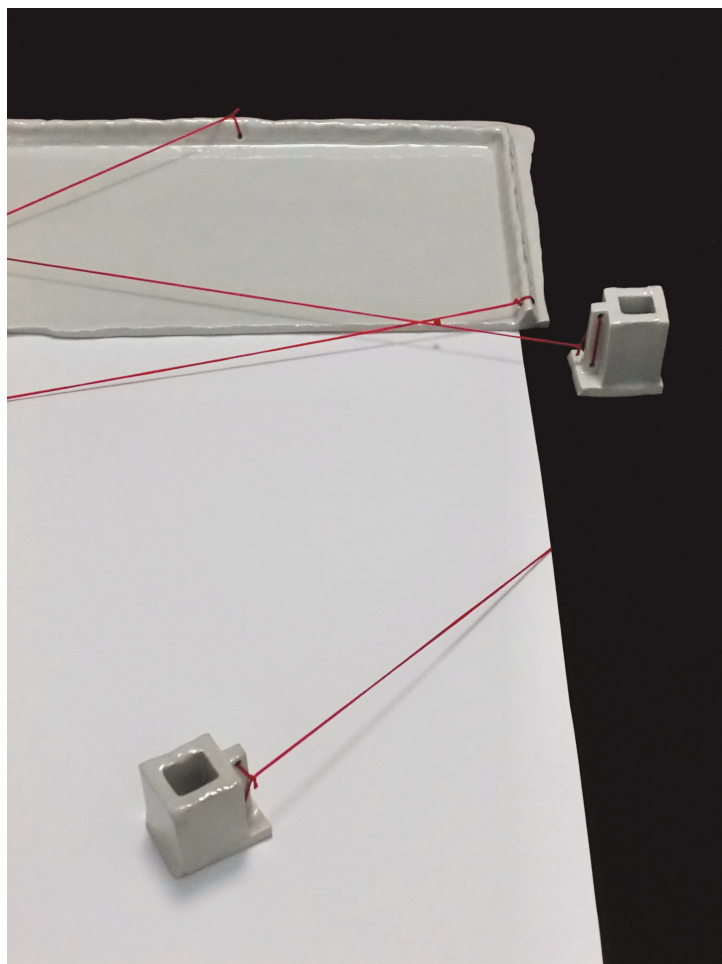
奈野 5 4 6 高 47cm



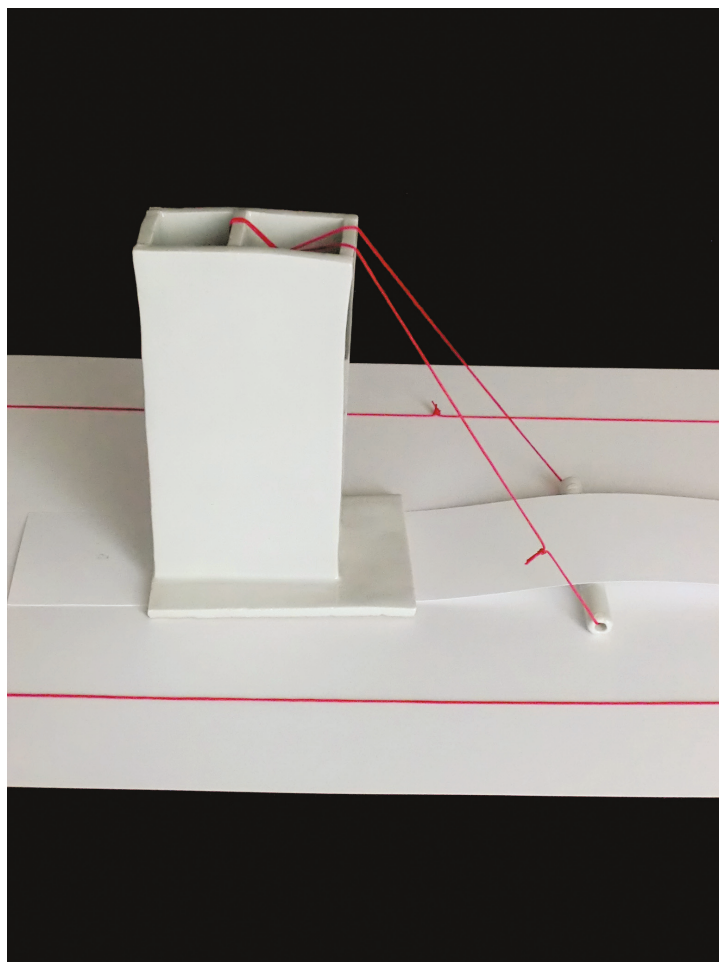
奈野 5 4 1 高 7cm



奈野 5 3 5 高 8cm



奈野 5 4 2 高 5cm



奈野 5 4 3 高 20cm